

《正岡子規（36）の続き》その309

天涯茫茫生

佐藤紅緑の続々

子規はかつて「仰臥漫録」（明治34年10月15日の項）に次の如く書いた。

われらなくなり候とも葬式の広告など無用に候 家も町も狭き故二、三十人もつめかけ候わば棺の動きもとれまじく候

何派の葬式をなすとも棺の前にて弔辞伝記の類読み上げ候事無用に候

戒名というものを用い候事無用に候 かつて古人の年表など作り候時狭き紙面にいろいろ書き並べ候にあたり戒名というものの長たらくて書込に困り申し候 戒名などはなくもがなと存じ候

自然石の石碑はいやな事に候

棺の前にて通夜すること無用に候 通夜するとも代りあいていたすべく候

棺の前に空涙は無用に候 談笑平生の如くにあるべく候

葬儀については、大体、子規の考えるが如くになったようだが、思ったよりは派手に

なったのではないか。僧侶の数など、六名とは子規はその多いのに顔をしかめたかもしれない。

戒名はなくてもいいと云っていたが、子規居士という簡単なものでおさまった。現代では、それほどでない人物にも、仰々しいえらそうな文字がつらねられている。戒名も金次第だという。

二十一日、朝からの雲が次第に収って、拭うが如き晴天となった。送葬参会者は百五、六十名に達したが、極めて静粛であつた。

鳴雪先導、迎僧、位牌、導師、侍僧、香爐、高張、棺、令妹という順序で、門下等は棺側。

根岸からかれこれ二十丁余、田端大龍寺に着し、式は最も厳肅に行われた。焼香順序は令妹、親戚の婦人、三並氏、鳴雪、陸氏、門下生等二、三人ずつ。次は会葬者諸氏。

埋葬にとりかかったのは十一時過ぎ。既に深さ八尺、長さ六尺五寸、巾三尺五寸の墓穴が掘られ、諸方から手向のため贈られた種々の菓物や草花が詰められた棺はしずかにここに下ろされた。そして近親者、門下生等が土をかけ、墓掘り人夫が最後の土盛をした。

現在は衛生上の見地、墓地の狭小化などで、火葬が殆んどだが、明治まではまだ土葬であつた。

「正岡常規墓」の木標が建てられ、その前に白張も立てられた。現在の三段の石の墓は、

明治38年4月ごろ建てられたもので陸羯南筆で、子規居士之墓と刻まれている。

紅緑この頃、世上にてとかく善からぬ噂ありたれど、俳句における紅緑は全く別人の如く清浄無垢なりしかば、相当の敬礼も尽したりと「仰臥漫録」（明治34年10月10日の項）に碧梧桐と語っている。

事実、紅緑はこの頃から数年、子規死後も俳句に熱心で、「蕪村俳句評釈」（明治37・3大）外、数冊の俳書を刊行し、38年には「読売新聞」、「都新聞」の俳壇選者となっている。

以後は各種の事業に手を出して失敗したり、劇団を組織したり解散したりした。

大正12年2月、外務省嘱託として映画研究のため外遊した。それは映画界の新しい進路に望みをかけてのことで、11月帰朝して、新設の東亜キネマの社長となったが、間もなく退社した。

その頃から、講談社の諸雑誌に連載小説を書き出し、大衆に迎えられた。

昭和2年頃から同社の「少年倶楽部」に「あゝ玉盃に花受けて」を連載して熱狂的に迎えられ、少年小説の大家とされた。

ただし、前半生は郷里弘前で、また関西各地、大阪と各地の新聞記者となり、時には自ら創刊するなど転々とした生活を送ったが、後半生は劇作家、小説家として安定した。